

北宋の三大家と個性の表現

(教科書 40〜41 ページ)

黄州寒食詩卷

北宋・一〇八二年／蘇軾

(空庖煮寒菜、
破竈燒濕葦。那
知是寒食、但見烏
銜紙。君門深
九重、墳墓在萬里。也擬
哭塗窮、死灰吹不起。

大意

(人気のない台所で粗末な野菜を煮ようと、)壊れたかまどに
湿ったあしの葉をくべる。寒食の日(中国では清明節の前日に
火を用いずに冷たいものを食べる)だとは知らなかった。烏が
紙銭(寒食の日に墳墓で紙銭を燃やして祭る習慣がある)をく
わえて飛んでいる。天子の御許は遠く、左遷の身では近づくこ
ともできず、ふるさとの墳墓も彼方である。道のないことを嘆
こうにも、冷え切った灰では吹いたところで燃えたたない。

虹県詩卷

北宋・一一〇六年頃／米芾

再題。
碧榆綠
柳旧游
中、華髮
蒼顏未
退翁天
使殘年
(司筆研、……)

大意

再び題する。かつて運河沿いの
榆や柳の中で遊んだところ。白
髪と青白い顔でいまだに退かな
い老人。天は私の余命に筆硯を
もたらし、……

松風閣詩卷

北宋・一一〇二年／黃庭堅

松風閣
依山築閣見
川。夜闌箕斗
屋椽。我来名
意適然。老松
梧數百年。斧
斤所赦今參天。
風鳴。媧皇五
十(弦。)

大意

松風閣

山によりそって築かれた樓閣から広い長江が見渡せる。夜
が更けると、箕・斗の星座が、軒端のたるきにかかっている。
私がこの樓閣を「松風閣」と名づけたのは、心境によくかなっ
ている。老松は数百年を経て堂々とたくましく、切り倒さ
れることもなく、今では天にも届くほどである。松風は女
媧氏(伝説上の女神)の五十弦の瑟(樂器)のしらべのようで、
……